

## 14. 世界樹物語

各務原市立中央小学校6年

戸崎 日南子 安藤 由希奈

↓

敦賀市立黒河小学校6年

櫻井 美穂

今私達が住んでいるのは、宇宙です。

しかし、それとはまた、別の世界があるのです。

暮らしている土地は、変わりませんし、食べているものも同じです。しかし、その世界は、一本の樹なのです。

一度、その世界が滅びかけたことがあります。

この物語は、それを救った三人の少年少女を記したものです。

文けん

『この世は、一本の樹から成る。その樹は、季節ごとに実をつけ、また、その実一つは一日となる。一日の終わり、朝夕鳥（ちょうせきちょう）はその実を糧とする。

春の実がなくなれば、夏の実に、それがなくなれば秋に、次に冬、そしてまた、春がくる。それを、繰り返している。

この樹を造り、番をするのは神メサイア。神が樹に与えたもうた水は、人々の恵となった。

神が喜せば晴れ、哀せば雨がふり、怒せば災いが起こる。

この樹が枯れるとは、世界の終わりを示すのである』

「聞いてたか？ ガルダ？」

金髪で左目のかくれた少年は、おもいきりはねている茶髪の少年に複雑な顔で聞いた。

「全っ然」

茶髪の少年——ガルダは、満めんの笑みをうかべて言った。

「笑い事じゃないだろ？ つか聞いてたろ、絶対」

「うん。でも意味不明だ。ウリエル分かんのか？」

「よっぽど馬鹿なんだな……」

金髪少年、ウリエルは、溜息をついて、先の文けんの書かれた本を閉じた。

「しょうがないわよ。そいつ、重症だし」

そう言って、ココアを三人分持って階段を上ってきたのは、二人の幼なじみのサティだ。

腰まであるポニーテールの赤髪をサラサラゆらしながら、サティは椅子に座った。

「おじいさん、何かつれます？」

川のほとりでつりをしている老人に、男でも女でもなくノイズがかかった映像のような銀髪の者が話しかけた。

「つれない訳じゃあないが、小物ばかりだ。大物なんぞつれやせん」

「そうですか」

そうって、映像のようなものは、灰色の空を見上げフッと消えた。

「昼間なのに暗いなー！」

ガルダは、サティの家（図書館）から一歩出て言った。

「くもりって……神のどんな感情がひきおこすんだ？」

ガルダが何気なく言った。

「神様は感情が届かない場所にいるのかも。最近、水の量減っちゃったし、魚も小さくなったわ」

サティは空を見上げて言った。

「水の量か」

ガルダがつぶやいたのを遠くで見ている男がいた。

闇で何も見えず。時々聞こえる鎖の音以外は、何も聞こえない。

冷たい空気と手にふれる鉄格子が、ここを牢屋だと教えてくれる。

（不覚だった……。このままでは、あの樹はっ！）

手足を鎖でつながれた銀髪の者——神メサイアは歯ぎしりした。

（私の映像と思念をとばすにも限界がある。物にふれることもできない）

見えない鉄格子をにらみつけ、目を閉じて思い出す。

自分を昏倒させ、ここにつないだ男を。

（……顔が思い出せない。そもそも仮面をかぶっていた……）

男の言った言葉は、恐ろしいものだった。

「水の量が減った、ってことは、神が樹に水をやるのをやめたんかなあ」

橋を渡りながら、ガルダとウリエルは話していた。

「やるのをやめたのではなく、やることができなくなったのかも」

水の減った川に目をやって、ウリエルはつぶやいた。

「何とかできないかな？ この樹から出て神様をさがしにいくとか」

サティが小さく言った。

「出る方法ならあるぞ！ イワシの頭を三つそろえて、川の水をかけるととびらは開く。たまたま見た本にのってた」

とガルダが叫んだ。

「やるつもりなのか？」

ウリエルがまさか……という顔でサティにきいた。

「やってみるしかないでしょ。ホラ！」

サティはウリエルとガルダの背を押した。

「小僧二人に小娘一人か」

目の前の映像を見ながら、仮面をつけた男が言った。

「こいつらに世界など救えるものか。今神は我が手中にあるのだ……」

不気味な笑い声をあげ、それは部屋中に木霊した。

(闇の力が立ちこめている……。いったいここは……?)

メサイアは、鎖をとくため三度力を使ったが全く効き目がない。

(どうしたものか……)

神は、その目を閉じた。

「準備完了！」

川の水の入ったびんを手に、ガルダが大きな声で言った。

地面には、三つのイワシの頭が並べて置いてある。

「じゃ、水かけるぜ！」

ガルダはイワシの頭に勢いよく水をかけた。

「……」

一分たっても何も起きない。

「ガルダのうそつき」

「サティだって、可能性あるって言っただろ」

「それはそうだけど——」

「おい！ 見ろ！」

ガルダは指をさして叫んだ。

そこには虹色に光る穴が開いていて、きれいというより不気味だった。

「何だ？ これ……？」

「とびらよ！ きっとそうよ！ ガルダ、信じてたわ！」

「現金だな……」

ウリエルはボソッとつぶやいた。

「くぐりなさい」

声が聞こえてきた。

三人とも、聞いたことのない声に顔を見合わせた。

「私はメサイア。その穴はあなたたちを導くために開けたもの。くぐったら、旅に必要なものをあなたたちは身に付けているでしょう」

「メサイア？ 神メサイア？」

サティが混乱気味に言った。

ガルダは、何も言わずに穴をくぐった。

続いてウリエルも中へ消えた。

サティもあわてて入っていった。

「でかい樹だな……」

ガルダは、一本の樹——世界を見てつぶやいた。

「いつのまに銃が……？」

サティの腰に、ホルスター二つと黒光りする拳銃がおさまっている。弾倉を入れるものもついている。

ウリエルの手には、短槍がにぎられていた。

ガルダは、木製だが刃のついているブーメランを手にしていた。

「何でこんなの俺持ってんの？」

三人がきょとんとしていると、神メサイアが木の下に現れた。

「よくぞ来てくれました」

肩まである糸のような銀髪。その上に葉でできた同じ色のティアラをつけていた。その姿は男にも女にも見える。

服は、古代ギリシア人のように白い布でできたものであった。

「あなたが、神メサイア？」

サティは、確認するようにきいた。

メサイアは、ゆっくりほほえんだ。

「メサイア様は、おきれいですね。浅葱色の目がとてもやさしそう」

メサイアは少しおどろいた表情をして、また元のようにほほえむ。

「ありがとうございます。あなたの金色の瞳は、人を魅きつける力を感じます。今の格好、似合っていますよ」

サティはえっと自分の服を見た。ピンクのワンピースが全く変わっていた。

ハートのチョーカー、そで口とえりもとに線が入ったうすピンクの半そで、白いミニスカート、ももまであるピンクのくつ下、金色の腕輪、複雑なつくりのブーツをはいている。

「……」

「ウベルリ様！ メサイアと子供三人の接しよくが確認されました！」

「分かっている」

仮面の男が、いら立ち気味に答えた。

「メサイアめ……。すぐにやつをねむらせろ！ 殺しても意味がない、殺せない……」

仮面のおくの光る目は、いまいましい不死身の神と、目の前にいないメサイアをにらんでいた。

「変な鎖」

「好んでつけているわけじゃない。ていうかなぐるぞ？」

ガルダにからかわれて、ウリエルは静かにキした。

後ろは短いのに左目がかくれるくらい長い前髪は変わっていない。

ウリエルは、交差した二連の鎖をいじくった。

「なんか動きにくいな……」

動くたびに鎖の音がする。

前が途中まで閉じた黄色いロングコートは少し暑そうだ。  
腰のあたりで開いていて、同じ色の長いズボンと黒いシンプルなブーツがみえる。

「ウベルリ様、メサイアはねむっていました」

「なんだと！」

ウベルリは、目を見開き（奴はねむりながら映像をとばすのか）と歯ぎしりした。

「まあよい。どちらにせよ、奴らに世界は救えまい」

ウベルリはフッと笑った。

「何で俺だけ服変わってないんだよ」

ガルダは苦々しげにつぶやいた。メサイアははっとした。

「忘れてました」

全員その場にどっとくずれた。

「今変えますよ」

とメサイアが手を上にあげると、ガルダの服が変わった。

「……ガキ」

ウリエルがつぶやいた。

「いーじゃーん。ガルダくん君はまだガキなんだからあ」

サティがフンと鼻で笑いながら言った。

すそにふさふさした毛が付いた皮のジャンパーに、赤い長そでの服を中に着ている。

ちょっとゆがんだ赤い服の下から黒い革のベルトがみえていてズボンもうす黒い。

特にジャンパーのひし形のバッジがガキっぽさを強調していた。

「変えてくれよっ！」

ちょっと涙目になったガルダがさげんだ。

「ガキっぽい格好でガキっぽくたのんでも、けっきょく十六なんだから」

サティがあきらめろと言うようにため息をついた。

「うそだろお——！」

「……さて、落ちついた所で私の話をしましょう。簡単に言うと、今私はとらわれています。私は今、映像をとばしているだけなのです。私をつないでいる鎖には、強力な闇の力が働いていて、私の力でさえちぎることが叶わないのです」

「今、貴方は何処にいらっしゃるんですか？」

ウリエルが聞いた。

「それが分からないのです」

メサイアは、伏せ目がちに、悲しそうに言った。

「相手は空間をつくり出す力を持っています。気を付けてください」

三人は、うなずいた。

「ところで俺の服変えてくれよ」

「む、無理ですうー。さっきので力を使い果たしてしまっ……。ああ、もう限界みたいですが、身体にひきよせられるっ！」

「あ、まって、ちょ、メサイアさん！」  
ガルダのさげびむなく、メサイアは消えた。

「フフ、愉快的な人達だった……」  
メサイアは暗闇に笑ってつぶやき、目を閉じた。  
「彼らなら、きっと——」

「どうする？」  
サティが、五回目の同じ言葉を言った。

「……さあ」

ガルダが、同じく五回目の言葉を繰り返す。

ガルダは岩の上に座り、ウリエルは木にもたれ、サティはただ立っていた。

「なやんでても仕方ないな。とりあえず適当に歩こう」

ガルダが言うと、サティがええっと声をあげた。

「そんなんでメサイアにぶつかるわけないでしょ！ あんた馬鹿！」

「うるせえなあ。しょーがないじゃん」

ガルダがさげんだ、その時だ。

「……鳥？」

ウリエルが上を見てつぶやいた。

それは頭は青く、羽が黄色で、体が朱色の美しい鳥だった。

鳥は、樹になっている実を一つ食べた。

「朝夕鳥か……」

ウリエルはつぶやいた。

朝夕鳥は、三人の前へおりてきた。

『汝らはメサイアに呼ばれし光の子か』

黄色に光る目でガルダを見つめた。

「光の子？」

サティが聞き返す。

『光の穴をくぐった者達のことだ。今一度問う。汝らは光の子か？』

「光の穴をくぐったのなら…、俺達だけど？」

ガルダが言った。

『ならば我が背に乗れ。我は、メサイアの居場所を知っている』

「え？ 本当なの？」

『我は神につかえし聖鳥が一つ。神の居場所は、分かる』

朝夕鳥は、静かな、低い声で言った。

『しかし、今メサイアは深い闇にとらわれている。その中までは、我は入ることができない』

「とにかかにも、じっとしてても始まんないよ！ 朝夕鳥、俺達をその場所へ連れてってくれ！」

ガルダが叫ぶと、朝夕鳥は、黙ってうなずいた。

(さすがにこれだけの間、闇の中に居ると気がめいる)

メサイアは、見えないまわりを見回した。

「気分はどうだね、神メサイア」

「！」

入って来たのは、ウベルリだった。

「なんなのですか？ 貴方は……」

メサイアは、落ち着いた声で見えない相手に言った。

「なに、ただこの世界の破滅を願う者だよ」

「何故そのような事を望むのです？ この世界には沢山の人が暮らしているというのに。沢山の動物や植物が、生きていうのに」

「俺は光が嫌いだ。闇は心を落ちつかせてくれるからな」

「確かに、夜の闇はつかれをいやし、安らぎを与えてくれますが、貴方が造ろうとしているのは、人々の悲しみやうらみの念が立ちこめるおそろしい闇なのですよ！ それで……グッ！」

メサイアはみぞおちをけられてしまった。ウベルリは笑った。

「それでいいんだよ」

「樹の外ってこんな風になってるんだ……」

三人は、神メサイアの居る場所に行くために朝夕鳥の背に乗っていた。

空間にうかんでいるかのような大地は、北の最果てに樹が、その少し南に行った所に湖があった。東には鏡が、西には空を型どった物が。そして南の最果てには何か暗くおぞましい空間がみえる。

三人は、その暗い空間へむかっているのだった。

「あそこにメサイアさんが……」

ガルダは、小さくつぶやき、ウリエルは短槍をにぎりなおした。

「えーと、弾倉には弾は十発……」

サティは銃をいじりながら、独り言を言っている。

「メサイアさんを連れていった連中は一体何が目的なんだ……」

その時だ。その空間から魔物が飛び出してきた。

瞳の無い黄色い目玉、薄気味悪い緑色の肌、長いつめ。コウモリのような羽。

二十体ほどまっすぐこちらへむかってくる。

ウベルリの刺客だ。サティは顔面蒼白になっている。

魔物の一体が近付いてきた。サティが、おそろおそろ銃を撃った。

パン！

かわいたはれつ音がして、魔物の頭がわれて、下へ落ちていった。

それにかまうことなく、他の魔物が向かってくる。

ギリギリまで近づいた魔物をウリエルは短槍で突きさした。

「ギャーっ！」

ガルダだけは大きな朝夕鳥の背を走り回っている。

「しっかりしろ」

ウリエルに短槍の柄で頭をたたかれ、ガルダはブーメランをビュンッと投げた。

バシッ

刃の部分こそ当たらなかったが、魔物の鼻に当たり、ガルダの方へ返ってきた。ガルダは、ブーメランをキャッチした。

魔物は口から炎を吹き、真っ直ぐガルダへむかってくる。

ガルダは叫んでブーメランを投げつけた。

すると、ブーメランは七色に輝き、炎をかき消した。

「げっ、また出てきた！」

魔物はどんどん空間から飛んでくる。

「ちょっと待て。こいつら、前進するだけで退いたりしない……」

ウリエルが言った通り、魔物たちは向かってくるがよけたりにげたりしない。

「つまり、魔物の群をぬければ……」

「うああああ！」

上からおそいかかってきた魔物の気味の悪さにサティが叫んだ。

パン！

という音がして魔物がうめいた。

「えっ、えっ、ええ！」

サティたちは巨大なシャボン玉の中にいた。

「割れるっ」

しかし、三人も入っているのに割れない。

「こ、これどうゆうことなの！」

サティたちの入っているシャボン玉にふれると、魔物はうめきながら落ちていく。

『きっと汝の力であろう』

朝夕鳥が言った。

「汝って、あたし……？」

おそるおそるサティが聞いた。

『ああ。このシャボン玉は、汝がうった弾から出て来た』

「なんだこれ」

ガルダが、シャボン玉の中にはりついている五まいの羽根を取ろうとした。

『取るでない！』

朝夕鳥が叫んだので、ガルダが二十センチほど飛び上がった。

『それは我の羽根。汝がまちがって入れた物だ』

「……朝夕鳥の羽根をまちがえてむしたのか？」

ウリエルが聞いた。

『少しばかり苦痛をともなったが気にせずともよい』

「う、ごめんなさい。ごめんなさい……」

「むう、魔物たち（ザコ）は、やくに立たなかったか……」

ウベルリは仮面をとった。



「メサイアはまだねむっているのか……」

そして再び仮面を戻すと笑い出した。

「フッフ……、ハーハハハッ！」

笑い声が響いた。

「寒っ……」

ガルダがふるえた。

見渡すかぎりに、エアコンやせんぷうき、ドライアイスまで並べられていた。

「なんだよコレ！」

となりからウリエルのうめく声が聞こえた。

「シャボン玉は？」

「何言ってるのよ！ あたしたち、シャボン玉から落っこちたのよ！」

「あれは朝夕鳥の五まいの羽根だろ？ それがシャボン玉になって……」

「だから、あんたがびっくりしたひょうしに一まい取ってたのよ！」

サティの言う通り、ガルダの手に羽根があった。

「でも、なんでドライアイスとか……」

「あんたたち二人が鉄版の上におちたの」

サティの話によると、シャボンが割れてガルダとウリエルは、山でキャンプをしていた家族の上に落ちたらしい。

「よく死ななかったなオレら」

「で、頭が熱いからって、エアコンやドライアイスがある山の頂上の村にいるのよ」

「腹へったぜ。なんか食べたい」

ガルダが言うと、

「お金、全部あんたのかばんの中」

とサティが言ったのでガルダはかばんの中から変なさいふを取り出した。

「あら？ えええっ！」

のぞきこんだウリエルまで目を見開いた。

中に大量のモン金貨が入っていたからだ。

「一、二、三……。うそでしょ！ 二十まいもある！」

(ちなみに私たちの世界でいうモンは一万円、ジンで千円、ゼンが百円、シンが五十円なのだ。十円玉、一円玉は分からない)

「これだけあるなら沢山買える……」

ウリエルがつぶやくとガルダは、

「いや、土地ぐらい買えるんじゃない？」

「いいえ！ 食料よ！ メサイアがとらわれている所までの食料を買いましょ！」

サティだった。

「しっかしな。樹の外にこんな村があるなんて……」

ふつう木は山より小さいけれど、この物語では木ではなく樹なのだ。

「見て！ 朝夕鳥が……！」

サティが叫んだとたん、朝夕鳥がうめきながら目をつぶった。

『うう、苦しい……。だれか水を……』

「朝夕鳥！ しっかりして！」

とけたドライアイスの入っている皿をなんとか朝夕鳥の口まで持っていくと、朝夕鳥は飲み始めた——というよりなめ始めた。

『汝らよありがとう。礼を言う』

その時、ブーンという音とともに、見たことのある映像が映し出された——神メサイアだった。

『大丈夫ですか？ しかしよく水になりましたね、ドライアイス……』

「あ！ ドライアイスってちっ素、水になるわけない……」

ウリエルがはっとして言った。

「ま、そこらへんはあなた達の心の力なのでしょう。実は私を連れ去った者の目星がついたのです」

メサイアがしんみような面持ちで言った。

「！」

「誰なんですか！」

「彼は……。彼の名はウベルリ。私の生き別れになった兄です」

「兄？」

三人がすっとな狂な声を出した。

「彼は世界の破滅を願っていました。でも、あくまで目星です」

「でも、兄が居るなら、何故あなたが神に？」

メサイアは遠くを見るように言った。

「……神には代々、ふたなりの者しかありません。完全な男である兄は神になどなれなかったのです。おそらくはそれで恨みを……」

「その通りだ」

すぐ上から、怒りにふるえた低い声が聞こえた。

「！」

四人は同時に上を向いた。

空中には、仮面を外したウベルリが立っていた。

「兄様！ やはり貴方が……！」

メサイアが叫んだ。そして悲しそうな顔して言葉につまった。

「メサイア、俺はこの数百年間ずっとお前を恨み続けてきた……」

「数百年間！」

ガルダがおどろいて声をあげた。

「だが、今それも終わる。お前の時代は終わったのだ！」

そう言ってウベルリは、大きな笑い声を上げた。

「そうはさせるかっ！」

ガルダは、ウベルリに向かってブーメランを投げつけた。

しかしウベルリの体をすりぬけ、ガルダの手元に戻ってきた。

「！」

「フッ、そんな物が効くはずもない。今俺は映像を飛ばしているだけだ。倒したくば、

闇の中まで追ってこい」

そう言ってウベルリは、闇の中へと消えていった。☆

四人は、だまっていた。朝夕鳥は、そんな四人の顔をかわるがわる見ながらちんもくを守っている。

やがて、ガルダが口を開いた。

「メサイアさんの兄にしては……ずい分とちがうな。その……性格とか」

その言葉を聞いて、サティがガルダをにらんだが、メサイアは

「いいんですよ。」

と弱々しくほほえんだ。

「私が神になる前は、とてもよいお兄様でした。しかし……」

そこで、メサイアは自分の感情を抑えてできるだけ明るい口調で言った。

「みなさん、必ずお兄様の野望を打ちくたいてください。私はあなた方を信じていますよ」

そう言ったとたん、メサイアの映像は消え、後にはまたしてもちんもくが続いた。しかし、さっきほど長くはなかった。ガルダの腹の虫がないたからだ。

「もう、あんたって本当に無神経ね」

サティが今まで息をとめていたかのように、ふうっと息をはき出した。

「だって仕方ないだろ」

ガルダがムツとした。

「まあまあ。」

と、ウリエルが二人をなだめる。

「で、どうする？ このままメサイアさんを助けるために旅を続けるか」

ウリエルの問いにサティがうなずく。

「当たり前でしょ！ 最初からそのつもりで来たんだから」

「よし、それじゃあ食料を買っておこうぜ」

と、ガルダはすかさず言った。

「えっと、これはこっちに入れて……。よし、準備完了」

サティが村の店で買った大きなリュックに食料をつめ終わってから言った。

そして、そのリュックを背負ってから立ち上がり、ガルダとウリエルの方を向いて、少し大きな声で呼びかけた。

「さあ、行くわよ。……早く！」

床に寝転がっていたガルダとウリエルは、サティの声にせかされるように立ち上がり、さっさと朝夕鳥の背に乗った。

「まったく……」

サティはぶつぶつ言い、朝夕鳥の背に乗る前に一言、

「あの、お願いできますか」

と、言った。

朝夕鳥は、返事をする代わりに、サティが乗りやすいように背を低くした。

息が苦しい。それは、一人が感じたことではなかった。風がようしゃなく三人の顔にぶつかってくるので三人とも感じたことだった。

「なんとか……できない……のかよっ……」

ガルダが、とぎれとぎれに言った。

「スピード……出しすぎ」

ウリエルも、風を少しでもよけようと顔を手で覆う。

「朝夕鳥……、そんなに……急がなくても……」

サティが朝夕鳥に言った。

すると、朝夕鳥は少しスピードを落とした。

しかし、まだ急いでいる感じだ。

『のんびりしてはいられない。世界の終わりが近づいている。樹木が枯れようとしているのだ。我には分かる……』

神メサイアがとらわれているあのくらい空間が近づいてきた。

しかし、ガルダだけは食料の入ったリュックからパンを取り出してきて、わき目もふらずに食べている。そして、時々、

「パンが飛んできそうだ」

などと言っている。

サティは身構え、ウリエルは大きく息をすった。

やがて、暗い空間が目の前に迫ってきたとき、急に朝夕鳥が空中で急停止した。朝夕鳥が急に停まったので、全員が前につんのめりそうになった。

「どっ、どうしたの」

ガルダが急いで残りのパンを口につっこみながら驚いた声でたずねた。

『言ったであろう、我はこの中に入ることはできない。後は、汝だけで進むのだ』

そう言ったかと思うと、朝夕鳥はゆっくりと下に降りていった。

完全に地面に着くと、ガルダたち三人は、朝夕鳥の背中から飛び降りた。

「じゃあな。朝夕鳥。また、会おうぜ」

ガルダは、手をふりながら言った。ウリエルもお礼を言った。

「ここまで乗せてくれて、ありがとう」

「私たち、がんばるわ」

『健闘を祈る』

朝夕鳥が、今までで一番穏やかな声を出した。

そして、すぐに飛び去って言った。かと思いきや、その場にうずくまり、寝息を立て始めた。

しかし、ウリエルとサティは特に気にもかけず、その場を後にした。

「朝夕鳥も、寝るんだ……」

ガルダは、ボソッと独り言を言って急いで二人について行った。

それから、さほど歩かないうちに、暗い空間の前にやってきた。

その空間の中では、闇がうごめいていた。黒い蛇のようにのた打ち回り、まるで今にも三人におそいかかってくるようだ。

「……この中に入るの」

と、サティは、二人にその闇の中に入ることを反対してほしい思いで言った。  
「俺……は、行くぜ。だってさ、中に入らないとメサイアさんを助けられないじゃん」  
「ああ。そうだな。俺も行く。サティは……」

「い、行くわよ！ 何、そんな決まりきったことを聞いているの」

サティは、いきり立って、そう言った。

ウリエルは、ガルダに肩をすくめて見せ、

「じゃあ、せーので入るぞ」

と、二人に声をかけた。

「うん」

「いいわよ」

「せーの……」

三人は、同時に闇の中にとびこんだ。

闇、闇、闇。どこを見ても光の『ひ』の字も見当たらない暗闇が、三人を覆いつくしていた。

「おーい、ウリエル。おーい、サティ。どこだよ……」

「すぐそばにいるよ」

ウリエルの声がガルダのすぐそばで聞こえたので、ガルダは驚いた。もう少しで、その声で悲鳴を上げそうになった。

「ウ、ウ、ウリエル……」

「私もいるわよ」

サティも、すぐ近くにいるようだった。

しかし、声は聞こえるけれども、二人の姿を、ガルダは見ることができない。

「なあなあ、これってさ……」

ガルダが、近くにいるだろう二人に言った。

「すげえ、濃いソースの中にいるみたいだな」

「ソースじゃなくて、墨汁だと思うけれど……」

「いや。絶対ソースだって。なんか濃いし、どろどろした感じだし」

「墨汁だって、濃いしどろどろした感じだろ？ 第一、ソースは茶色だし……」

ガルダとウリエルの二人が、言い合っていると、

「いい加減にきなさい」

と、サティの大きな声でしたので、二人は一気に黙ってしまった。

「今は、そんなばかげた話で盛り上がっている場合じゃないでしょ」

「別に、盛り上がっているわけじゃねーよ。ただ、ソースみたいって……」

「いや。墨汁に決まってるって」

またまた、二人はさっきの話題に戻ってしまった。

サティは、うんざりして、

「もうっ。知らない」

と、はき捨てるように言うと、暗闇の中を一人でとことこと歩き始めた。

「おいっ。サティ」

ガルダは、叫んだが、サティの返事はなかった。

「……やばくね？」

「お前がまた、ソースの話始めるからだぞ。サティのやつ、本気で怒ったんじゃないか」

「でも、お前だって墨汁の話を」

「わっ……きゃあああああ！ 誰か……」

サティの声だ。どっちから聞こえてくるか、ガルダは耳をすませた。

「うーん。こっちだ」

ガルダは、サティの声のする方へと走って行った。

ウリエルもその足音を頼りについて行く。

しかし、すぐに二人は不思議な光景を眼にし、立ち止まってしまった。はるか向こうに光が見えるからだ。しかし、よく見るとそれは光っているというよりも、闇が薄くなっているだけだった。

「薄口ソース」

「水で薄めた墨汁……」

ウリエルとガルダは、またそんなことを口にしながら、その闇が薄くなっている場所に向かった。

そこには、切り立った崖があった。その崖がいったいどこまで続いているのか、全く見当がつかなかった。

幅は、おそらく二十メートルはあるだろう。ウリエルたちの立っている場所からそう遠くないところに、なぜだかロープだけで作られたつり橋がかかっていた。

「わあ……すげえな」

ガルダがウリエルに追いついて、言った。そして、辺りを見渡した。サティを探すためだ。

「ウリエル……。ガルダ……。ここ、ここよ……」

サティの声だ。

ウリエルとガルダは、つり橋にいるサティを見つけた。

サティは、つり橋のロープがちぎれてしまった時にできた穴に胸まですっぽりはめてしまっていた。サティの手は、他のロープをにぎり青ざめながらも、つり橋から落ちないようにしていた。

そして、二人に、

「つり橋を渡ろうとしたら……穴が開いてて。気がついた時には、左足がもう穴にはまていて。抜こうとしたら、こんな風に……」

「すっぽり、はまちやった？」

ガルダは、笑うのをやっところえて言った。

「わっ、笑いごとじゃないわよ。早く助けて」

「へえ、自分で怒ったせいじゃないか。穴にも自分ではまったんだろう。って言うか胸まではまるとは……」

ウリエルもわざと意地悪っぽく言った。

「……ごめんなさい。あやまるから早く助けてよ。まさか、見捨てて行ったりしないわよね」

サティは、少し心配になり、すがるような目で二人を見た。

ガルダとウリエルの二人は、そんなサティの姿がおかしかったが、笑うのをやっところえていた。

サティに勝ったような気になるのは最高に気持ちがいい。

「仕方がないなあ」

ガルダとウリエルは、まだこみ上げてくる笑いを必死でこらえて、顔をゆがめながらもサティをひっぱった。

最初は、片方ずつ手首をもって軽く引っ張って見たが少しも動かなかった。だから今度は、サティの腕を持ち、思いっきり引っ張った。

「いっ、痛い。レディなんだから。もっと慎重にやさしくしてよ」

サティが文句を言った。

それでもなお、ガルダたちは、サティを助けようとがんばった。

ウリエルは額から大粒の汗を流して言った。

「本当に抜けるのかな。もし、このまま抜けなかったら……」

「いや、いや。それはやめて」

あれからどれくらいの時間がたっただろう。

まだ、ウリエルとガルダは、サティを穴から抜こうと必死にがんばっていた。二人は、いい加減に諦めそうになってきていた。

ガルダは、とうとうサティの腕を放してしまった。ウリエルも、

「きっと、ずっと穴にはまってろってことだよ」

と、その場に座り込んでしまった。サティも疲れたのだろう、もう何も言い返すこともなくじっと黙っている。

「それにしても、橋の向こう側はどうなっているんだろう」

「確かに。ちょっと二人で見に行ってみようぜ」

と、二人は立ち上がりサティを置いて橋の向こう側に行こうとした。

そして、ウリエルはサティに言った。

「ちょっとだけ、橋の向こう側を見てくる。だから、そのまま待ってて。きっとすぐに戻って来るから。……多分」

そんな二人に、サティは何かを言う元気はもう残っていなかった。ただ、目を閉じているだけだった。

そんなサティを置いて行くのは、ガルダもウリエルも後ろめたい気持ちではあったが、それでもその場を離れていってしまった。

歩きながらガルダは、ウリエルに心配そうに言った。

「本当に、サティをあのまま置いていくのか……」

「見捨てたわけではないんだし。ウベルリを倒したらすぐ戻るさ」

心配そうなガルダとは反対に、ウリエルは平気な声でそう言った。それでもガルダは、心配な気持ちは消えずにいた。

「それに、こういうときこそ女のカも必要になってくるんじゃないのかな。本当に男二人で倒すことなんてできるのかな……」

ますます、ガルダは不安になってきたようだ。

後、五メートルで向こう側に渡れるという所で、ブチッといういやな音が聞こえた。しかし、ウリエルは落ち着いていた。

早く向こう側に渡ろうと急いだ。所が、次第に、ブチッ、ブチッと、あちこちでつり橋の綱が切れる音が激しさを増し、つり橋が、右に左に大きく揺れ始め、橋が傾き始めた。

「ぎょえ……」

と、悲鳴を上げたガルダは暴れ始めた。

そんなガルダを見て、ウリエルはガルダを落ち着かせようと必死に声をかけている。しかし、そんなウリエルの声もガルダには届かず、ガルダは全速力で橋を渡りきろうと走り出したのだ。

ますます、橋の揺れは右に左にと大きくなるばかりだ。

「サティ……。サティは無事か」

ウリエルがふり返ろうとした瞬間、つり橋の綱は切れそこから橋は、下に向かって落ちていった。

また、辺りは真っ暗になった。地面も闇。周りを見渡しても何も見えなかった。そして、何も聞こえない。耳をすませていると、どこからか鎖の音がしたようだった。

その音に反応して、地面に座り込んでいたガルダが、うめき声を上げながら立ち上がった。そして、暗闇で自分の体すら見えない体確かめるように手で触っている。

どこも、けがをしていないことが分かり少し安心したが、サティやウリエルの様子も気になって仕方がない。どうやら、ウリエルは自分のすぐそばにいる気配を感じることができた。

しかし、サティは一体……と、サティを心配していると、急に足元が青白い光を放し出した。その光は、みるみるうちに足元から腹や胸まで上がってきて、とうとうガルダは、体中からまばゆいばかりの光を発していた。

ガルダは、ぽかんと口を開けて不思議に思っていると、ウリエルの体も自分と同じような光を放し始めた。そして、サティの体も同じように光っているではないか。サティの光が、自分たちの近くまで来た。ガルダとウリエルは、サティの無事を知り安心したかのように少し微笑んだが、三人は、サティの背負っていたリュックがないことに気がついた。

「リュックなくしちゃった……」

と、サティはひどくうなだれている。

リュックには、貴重な食料が詰め込まれていただけに、とても悲しそうなサティを見て、ガルダは、

「おれはもういいよ」

と言い、ウリエルは少しがっかりしている。

そして、三人は体のどこにもすり傷一つもおっていないことに驚いた。すると、どこからともなく、

「どうやらワープをしたらしいな。光の力で……」

と、三人の声以外の声がした。

「誰？」



サティが緊張した声で、見えない相手に向かってたずねると、音もなく近くに姿を見せ、サティを驚かせた。

そして、三人はすぐにこの人物こそがウベルリであることに気がついたのだった。

ウベルリは、三人に気がつかれると今度は、被っていたお面を外した。どうやら、三人の子どもたちがここまでやってくるだろうとは夢にまで思っていなかったらしく驚きを隠せない様子であった。

橋から落ちて三人が無事だったので、ウベルリは順番に一人ひとりを見つめた。ガルダは、メサイアが今、どこにいるのかをいらいらしながら早口で聞いた。

ウベルリは、なぜだか笑みを浮かべながら後ろを向いた。ガルダは、その方向に走り出した。闇の中ではあったが、光が足元を照らしてくれているので周りの様子がよく見え走りやすかった。

すると、少し先にオリのようなものが見えてきた。

(まさか。この中に……)

ガルダは、胸の鼓動が高鳴るのを感じながら、足を速めた。

そして、その牢屋のようなおりの中には、手足を鎖でつながれたメサイアが疲れきった様子で眠っているではないか。

ウリエルもサティもガルダのそばにやってきて、メサイアの姿を見て衝撃を受けた。サティは、これがウベルリの罠ではないかと心配し、三人はそのおりにはなかなか近づくことができなかった。

そんな三人の姿を見ていたウベルリが近くに歩み寄ってくるではないか。サティは、持っていた銃をウベルリに向けて叫んだ。

「今すぐに、神を牢屋から出しなさい」

「メサイアを出すか出さないかは、お前たち次第だ」

と、ウベルリが返事を言った。

それを聞いたサティは、銃をおろした。

銃を下ろしたそのとたんサティたち三人は、激しい痛みを襲いかけられた。そして、それはまるで全身に、針が突き刺さっているかのような痛みだった。

「お前たちに俺を倒せない。だから、俺の仲間になれ。共に、世界の破滅を実現せよう」

と、ウベルリは話し始めた。

「分かった。だから早く……メサイアを……」

ガルダは、メサイアを無事助け出そうと必死に話し始めた。

「いいだろう」

ウベルリは、あっさりガルダたちを下ろしてくれた。

ガルダは、小さな声で、

「俺、ウベルリの仲間になる」

と、ウリエルに言った。

ウリエルは、今のガルダの言葉をすぐには理解できない様子でいた。ウリエルは、ガルダが本当にウベルリの仲間になろうとしているのかどうか必死で彼の目を見つめている。

サティもどうやらその言葉が聞こえたらしく泣き始めた。

ウリエルもどうしていいか分からなくなり目を下に落としてうつむいてしまった。

ガルダは、そんな二人をしばらく見てから、何も言わず本当にウベルリの元へと走り出してしまった。

「これで光の子は一人いなくなった。後の二人は、無力だ！」

ウベルリは、そう言って高笑いをした。

ウリエルとサティは、なすすべもなくただただ呆然とウベルリとガルダを見つめていた。するとまた、あの鎖の音が聞こえ出した。

ウベルリは、ガルダに何やらこっちへ来い、とでも言っているかのように手招きしている。ガルダたちはどうやらメサイアがいる牢屋に向かったようだ。

ガルダは、牢屋に着くとすぐにメサイアを見つけることができた。メサイアは、鎖でつながれ眠っていたが、鎖だけがなぜか動いている。メサイアのかだろうか。ウベルリは、牢屋の前にあるボタンを手にとって、

「このボタンさえ押せばお前は自由になれるが……。ふんっ、誰がそんなことをするか。一生この牢屋にいる」

と、言って牢屋に向かってつばをはき捨てた。

「ねえねえ、ウベルリ」

ガルダは、すぐ隣にいるウベルリに話しかけているが、返事がない。

「ウベルリ様。そのボタンって何」

と、大きな声で聞いてみた。

ウベルリの手には、小さな赤いボタンがにぎられている。

やっと、ウベルリはガルダの声に反応してこう言った。

「これか、このボタンは闇を作ったり消したりすることのできるボタンだ。今は、この闇が作られている状態だからボタンを押すと……」

ウベルリの話が終わるか終わらないかという時、ガルダはウベルリからその赤いボタンを奪い取ることに成功した。

ガルダは、油断しているウベルリの手からボタンをうばい取り、にやりとした。

反対に大事なボタンを取られてしまったウベルリの顔は、急に真っ青になり大きな声で怒鳴った。

「そ、それを返せ！ いや、返してくれ……」

ガルダは、そんなウベルリの声を見殺しして、ボタンの上に手を置いた。

「やめろ……」

叫ぶと同時にウベルリは、ガルダからボタンを取り返そうとしたが、

ポチッ

とガルダの方が一瞬早くボタンを押していた。

しかし、何も変わらない。

何も起きないではないか。静かな時間がどれだけ過ぎただろうか。静かだった地面が、小さく震えだした。

「あー。あああー。俺の闇の空間が……」

ウベルリは、絶望の声をあげ、ひざまづいた。

そして、不気味な笑い声を上げ始めた。

その間に、どんどん地面の揺れは激しさを増し、ひびが入り始め、地面が大きくゆがみだした。

そんな中、ガルダはサティとウリエルの方へ走り出し、自分のしたことに満足したかのように、二人に、

「俺ってすごいだろう。なっ。なっば」

と、声を弾ませた。

そんなガルダを目の前にし、二人は呆然とするだけだったがようやく二人は我に帰り、ガルダを見つめた。

「ガルダ。お前ってやつは……」

と、ウリエルは驚きと喜びの声を上げた。

サティも同じ気持ちなのだろう。満面の笑みを浮かべ、ガルダを見つめている。

ウリエルは、一瞬ガルダが本当にウベルリの仲間になったかと疑ったが、すぐに嘘をついていることが分かっていた。

それはサティも同じだった。

「おい、ウリエル。もっと素直に喜べよ。お前は、いつても難しい顔をしている」

ウリエルは、まだ何か不安があるような様子だった。

そんな中、空間はまだ大きく揺れている。そして、どんどんゆがんでいっている。意外にも、

パンッ

と小さな音がしたかと思うと同時に、辺りが明るくなった。

これでやっともとの世界に戻ったかと三人は喜んだ。

しかし、いつの間にか牢屋から出たメサイアが、三人を見つめ、暗い顔で言った。

「いいえ。まだ、ダメです」

三人は、エッと驚いた。ウリエルは、メサイアにどういうことなのかたずねた。

「ここから北の方角に、わたしの命の源でもある樹が立っています。その樹が枯れかかっています。闇に包まれてわたしの気が届かなかったのでしょうか。生命力が弱っていて……残念ながらも手おくれです」

メサイアが言い終わると、サティの顔から、笑顔が消えてしまった。

何かいい方法はないかと、ガルダとウリエルそして、メサイアは必死になって考えた。

メサイアは、どこからともなくガラスのじょうろを取り出し、ガルダに差し出した。とにかく、このガラスのじょうろを持って自分たちの目で、その樹を確かめてきてほしいと……。

ガルダは、すぐにそれを受け取り、ウリエルとサティと共に北の方角に向かった。朝夕鳥は、そんな三人を背に乗せ飛び立った。

一方、ウベルリはさっきのボタンを見つけ、すばやく拾い上げてもう一度力いっぱい押してみた。しかし、もうボタンはこわれていたのか何の力もなかった。

三人を乗せた朝夕鳥は、樹の近くに下りた。ガルダは、途中の湖でくんできた水が入

っているガラスのじょうろで、樹の根元にたっぷりの水をかけた。ウリエルとサティも、ガルダの側に行った。サティは、心配そうに大きなその樹を見上げた。ガルダは、何も変わらない枯れかけた樹を見つめがっかりして肩を落とした。

そんなガルダの様子をサティは、見逃さなかった。

サティは、ガルダがしりもちをつくほどの力で思いっきりほっぺをたたいた。ガルダは驚きながらもサティの辛い気持ちが伝わってきた。

「……私たちが諦めるって言うことは、世界が終わってしまうってということだからね」

サティは、泣くのをやっところえていたが、その場に泣き崩れてしまった。

そんな二人を見ていたウリエルが、今度は水をやり始めた。

それを見たサティは、泣くのをやめウリエルと一緒に水をあげた。そして、ガルダも一緒に。三人の気持ちは同じだった。

諦めるものかと、心の中で何度も何度も繰り返し言い聞かせていた。そして、自分たちが世界を救うのだという意志をさらに強めていた。

突然、じょうろの水が輝きだし金色に染まりだした。

それだけではない。ガラスのじょうろから、やわらかな光が放ち始めた。

「なんだか、できそうな気がしてきた」

ガルダたちは、樹に水を上げるのを続けた。不思議とじょうろから水は減らない。どんどん水が出てくる。

気がつくと、朝夕鳥の側にメサイアが立っている。メサイアは、三人の諦めないという強い心を感じ取り喜びでいっぱいになっていた。三人の心が一つになったのだと。

三人は、ゆっくりと樹を見上げた。なんということだろう。樹が生き返っているではないか。葉がきれいな緑色をし、枝葉まっすぐに伸び、生き生きと立っている。ガルダは、飛び上がって喜んだ。世界が元に戻ったのだ。朝夕鳥も喜んでいる。

『やはり、そなたたちは光の子だ。ありがとう』

朝夕鳥は、三人に向かって言った。

メサイアもガルダ、ウリエル、サティの側へ行き、朝夕鳥を見ながら言った。

「そろそろ、長い一日が終わろうとしています。あなたたち三人は、本当によくやってくれました。どんな言葉で感謝の気持ちを伝えればよいか。うまく言葉が見つかりません。許してくださいね。さあ、あなたたちを元の世界に戻します。もう安心して暮らしてください」

ガルダは、それでもまだ、ウベルリのことが気になった。

メサイアが、ちゃんと話し合うことを約束した。

そして、後は、自分に任せてほしいとも言った。

それを聞いた三人は、心から安心した。

そして、この旅ができたこと。そして、この旅を通して、様々なことを経験したことに素直に感謝していた。

「じゃあ、私たち帰ります」

と、サティが言うと、メサイアは初めて会った時に見せてくれた笑みを浮かべて三人を見送ってくれた。

「さよならー。メサイアさん」

と、ガルダが言うと、メサイアは目を閉じ、呪文のような言葉を唱えた。それと同時に、三人は煙で見えなくなっていた。

小鳥のさえずりで、三人は目を覚ました。

もう朝だった。三人は、立ち上がった。

「夢、じゃなかったよな」

ガルダは、窓の外を眺めながらつぶやいた。

外の川も元の水位に戻っている。ガルダたちが今いる場所は、図書館だった。

ウリエルは、机に置いてあった本を拾い上げた。

サティは、ポニーテールを結びなおしながら、メサイアがうまくウベルリと話し合うことができたかどうか考えていた。

さっきウリエルが拾い上げた本は、文献の書かれた本であった。

ウリエルは、片付けたはずの本を何気なくめくった。そして、

「ガルダ、お前も読むか……。なっ、お前には難しすぎるだろう？」

と、からかってみたがガルダは、満面の笑みを浮かべて言った。

「全っ然」

三人の少年少女のおかげで世界は平和を取り戻した。

人々は、以前のような穏やかに暮らし、動物たちはまた、のんびりとした毎日を送っている。

三人の少年少女の心には、この旅を通して新たな何かが生まれた。

それは、勇気・友情・そして、助け合いー。

三人は、これからもいろいろなことを学ぶだろう。

そして、この世界が終わることはもうないだろう。

たとえまた、この世界が滅びかけ全てが闇に包まれかけても、小さき冒険者の手によって救われるのだ。

また、世界の破滅を願うものが現れても——それを救おうとするものがきっと現れるだろう。

そしてこの世界に平和を取り戻してくれることだろう。

その者が、未来に存在することを願ってこの文の終わりとしよう。